



# 病診連携

豊橋ハートセンター(愛知県豊橋市)



院長/循環器科 鈴木孝彦(写真左)

副院長/心臓血管外科 大川育秀(写真右)

## 循環器疾患の急性期治療に特化し 高度な技術で在院日数を大幅に短縮

1999年5月に開院した豊橋ハートセンターは、循環器疾患の急性期治療に特化した施設だ。国立療養所豊橋東病院の循環器内科医であった鈴木孝彦院長が10年来思い描いてきた「患者中心の理想の病院」を具現化したもの。19床の有床診療所としてスタートし、2001年4月に30床の医療法人になり、循環器内科医8人、心臓血管外科医3人、看護婦25人という豊富な医療スタッフを揃える。いってみれば、高度専門医療施設から循環器部門のみが独立したユニットのようなものだ。

### 日帰りカテーテル検査で患者の負担を軽減

同院は24時間救急体制を完全実施している。東三河地区80万人医療圏内においては、循環器疾患に関するあらゆる救急患者を受け入れる。救急以外ではカテーテル検査依頼をはじめ紹介患者の多いことが特徴だ。市内はもとより東海・北陸などからも患者が訪れる。開院から2年を経た2001年4月の段階で、9,500人(カルテ数)中2,300人、つまり約1/4が紹介患者である。とくに難しいインターベンションや外科手術に関しては遠く他県からの紹介も少なくない。心臓血管外科を専門とする大川育秀副院長が手がける冠動脈バイパス手術などは8割が紹介。地域の開業医はもとより大病院の循環器専門医にとっても頼りになる存在となっている。

鈴木院長が専門とするカテーテル検査は日帰りで行われることが多い。カテーテル検査は2泊3日で行うという施設がほとんどだが、ここではほぼ毎日10人前後の患者が朝8時半に集合し、ほとんどの検査が午前中に終わる。2000年、入院患者も含め診断カテーテル検査は3,014例に実施され、うち2,344例(78%)

が日帰りだ。これが可能なのは熟練スタッフの技術があつてのこと。左手首の橈骨動脈から細いカテーテルを挿入する方法で患者への侵襲を最小限に抑える。右ききの人の利便と脳梗塞合併の減少などを考えて、左手首から行うという。

「アメリカでは日帰りが常識ですが、日本ではまだ少ない。しかし、技術的な裏付けとトラブルに対するの万全な体制があれば入院は必要ありません。外来でカテーテル検査ができるのは患者様にとって安心感がありますし、社会的にも経済的にもメリットがあります」(鈴木院長)

### トップクラスのPTCAとバイパス手術

鈴木院長はPTCA(経皮的経管的冠動脈血管形成術)に関して日本でもトップクラスの技術・実績の持ち主。バルーン療法はもとより、ステント療法、ロータブレード・DCAといったアテレクトミー療法も実施。バルーン療法の中でも、アテロームに切開を加えながら血管を低圧で拡張するカッティング・バルーンを得意とする。PTCAは1日約5件、基本的に1泊2日で行われる。カテーテル治療は2000年は1,240例実施した。

一方、日本で屈指の症例数をもつ大川副院長によるバイパス手術も注目に値する。開胸を必要としないMID-CAB(最小侵襲冠動脈バイパス手術)や人工心臓を使わないピーティング・ハートなどを積極的に施行し、高い治療効果を上げている。バイパス手術は1日2~3件、週4回実施している。通常1カ月の入院を要するバイパス手術が、MID-CABに至っては5日程度で済む。

「人工心臓を使わない、大動脈を触らない手

術なら患者様の負担が少なくなりますし、バイパス手術最大の合併症である脳梗塞のリスクが大幅に減ります」(大川副院長)

バイパス手術により血栓が脳に飛ぶリスクは通常1~3%といわれている。だが、同院で2000年に実施されたバイパス手術180例中、脳梗塞の合併は1例もなかった。

### 平均在院日数4.6日は全国トップ

高いレベルのPTCAやバイパス手術により、平均在院日数は大幅に短縮され、日本の急性期特定病院中トップの4.6日という数字を達成している。急性期治療が終われば患者は即座に紹介元の開業医や病院に戻される。6カ月後の定期的なチェックこそ同院で行われるものの、フォローに関しては紹介元に一切任せるとの方針を徹底している。

「救急に備えて病床はなるべく空けておき、当院は急性期治療に徹したい。満床にすることで収益を上げるような医療は行いません。現在、私は外来でも1日100人前後の患者様を診ていますが、できれば外来部門は極力、地域の診療所などにお任せしたい。急性期治療と一般外来を明確に機能分担する、これが本来の病診連携ではないかと思います」(鈴木院長)

病診連携を推進する鍵は、実は急性期病院側が自らの役割に徹しようとするこうした姿勢にあるのかもしれない。



最新医療の最新アプローチ

## Cardiology & Strokeology Update No.4

企画・発行:第一製薬株式会社 〒103-8234 東京都中央区日本橋三丁目14番10号  
編集・制作:トーレラザール・マックヤン 編集協力:第一メディカル株式会社

J-S52 第1版  
01年7月作成010449TLM